第６課　解釈はなぜ必要なのか

【暗唱聖句】

「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神が存在しておられること、また、神は御自分を求める者たちに報いてくださる方であることを、信じていなければならないからです」へブル11:6

【日曜日・前提】

聖書を読むとき、誰でもその人の人生経験や歴史、今置かされている状況や自分の思いなど、様々なものの影響下で読むことになります。そのため聖書を読んだときに受ける印象やとらえ方が、神様が意図していることとずれてしまったり、よく理解できなかったりということがしばしば起こります。イエス様の弟子たちでさえそうでした。復活されたイエス様が、驚く弟子たちに対して、「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。これこそ、まだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである」（ルカ24:44）と言われましたが、彼らはイエス様に関するできごとについてしばしば誤解したのは、彼らの経験や思い込みなどが、正しい理解を妨げていたからです。

　たとえば、わたしたちは誰もがこの世について、死について、神様について様々な考えを持っており、聖書を読むときも、それらを前提として読んでしまいがちです。その結果、異なる聖書の理解が生まれるのです。心の中をゼロの状態にして読むことができれば良いのですが、それは簡単ではないのです。それでもなお、聖霊はわたしたちに真理が理解できるようにと導いてくれます。聖霊はわたしたちの限られた考えや前提を矯正することができます。それゆえ聖書の理解が深まるにつれ、全く新しい世界をその中に見出していくのです。

【月曜日・翻訳と解釈】

聖書は大変古い書物であり、旧約聖書の大部分はヘブライ語、新約聖書はギリシャ語で書かれています。そして、それぞれの国の言葉に翻訳されて、わたしたちが読むことができるようになっています。ただ、翻訳の過程において、正しい翻訳が行われているのか吟味しなければならないことがあります。誤訳がないとは言えないし、翻訳者の解釈が多少なりとも含まれていないとは言えないからです。聖書に使われている原語が、その国の言葉にないこともあります。そのため非常に慎重な作業が求められるわけです。

ただ、聖書の中に啓示されている重要な真理を正しく理解する上で、必ずしも原語を知らなければわからないわけではありません。翻訳された言葉でも十分正しく、聖書の一番大切なメッセージを受け取ることができるように、聖霊は導いて下さっています。その点は安心して良いでしょう。その上で、さらに深く聖書の奥義に触れるために、原語の意味を知ると役立つことがあるということです。

また、復活後にイエス様が弟子たちに、聖書の全体にわたって、ご自分のことがどこに、どのように書かれているのかを説明されました。

「そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された」ルカによる福音書24章27節

　これは弟子たちがみ言葉を正しく理解していなかったので、イエス様は特にご自分について書かれてあることを、わかりやすく説明されたわけですが、わたしたちも同様に聖書を誤解して読んでいることがあるかもしれません。だから、その意味を正しく知るために、解釈も交えながら学ぶ必要があるのです。幸いなことに、わたしたちの教会には証の文がありますし、その他にも先人たちが長い年月をかけながら積み重ねてきた聖書の解釈にも学ぶべき価値があります。ただ、最後は一人一人が聖霊に導かれて目が開かれた時、はじめて「わかった」と思える経験をします。このような経験によって悟った真理は、忘れることがありません。

聖書がただの書物と異なるのは、その一つ一つの言葉の中から、神様がわたしたちに語りかけているメッセージを読み取ることができることです。実際に書かれていることは、イスラエルの歴史だったり、弟子たちの手紙だったり、詩篇のような詩だったりするわけですが、それが現代に生きるわたしたちに何を意味しているのか、どのように適用しなければならないのか、それをつかんでいくことが大切です。

【火曜日・聖書と文化】

聖書はヘブライの文化を中心に、中近東やギリシャ、ローマなどの文化が色濃く反映されています。そのため聖書を読むときには、それらの文化背景を知らないと理解が難しいことが少なくありません。しかし、聖書のメッセージは特定の文化にだけ関係しているものではもちろんありません。全人類に向けての神様からのメッセージです。文化的な違いを超えて語られているのです。パウロがアテネで説教を語ったとき、ギリシャ哲学に合わせてメッセージを語りました。しかし、その中で「神は、一人の人からすべての民族を造り出して、地上の至るところに住まわせ、季節を決め、彼らの居住地の境界をお決めになりました」（使徒言行録17章26節）と語り、人間の始まりは同じであり、文化的な多様性はあっても、すべての人を、結びつける共通点があることを明確にしています。

【水曜日・罪深く、堕落した人間の性質】

罪深く堕落した人間は、聖書を素直に読めないことがあります。イエス様はファリサイ派の人たちに、「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る」（ヨハネ9：41）と言われました。高慢、自己欺瞞、疑い、不服従などの罪が、聖書を正しく理解させるのを妨げることがあります。本来、聖書の御言葉は私たちに罪があることを教え、悔い改めへと導くものです。ヘブライ人への手紙4章12節に、「神の言葉は生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができるからです」とある通りです。しかし、罪が脈々と生きているとき、自分の罪を聖書から指摘されたとき、それを素直に受け入れることができなくなってしまうのです。誰もが聖書を読むときに、自分の罪の問題を相対することになります。そのようなときにも逆らうのではなく、素直になって罪を認め、罪の問題をすべて主に委ねることが大切です。主はすべてを赦してくださいます。

　また、「議員の中にもイエスを信じる者は多かった。ただ、会堂から追放されるのを恐れ、ファリサイ派の人々をはばかって公に言い表さなかった。彼らは、神からの誉れよりも、人間からの誉れの方を好んだのである」（ヨハネ12：42、43）とありますが、聖書は神様とこの世のどちらを選ぶのか迫ってくることが少なくありません。そのため聖書を読むとき自分の都合の良いところだけを読んだり、都合の良い解釈をしたりということのないように注意しなければなりません。

【木曜日・なぜ、解釈は重要なのか】

バビロン捕囚からエルサレムに帰還した人々は、広場に集まって律法の書の朗読に耳を傾けます。その際に、読み上げる者たちが、「神の律法の書を翻訳し、意味を明らかにしながら読み上げたので、人々はその朗読を理解した」（ネヘミヤ記8：8）とあるように、聖書の翻訳も解釈も、昔から行われていたことでした。そして、それが正しく行わるとき、老若男女問わず、多くの人たちが聖書を正しく理解することができました。注意しなければならないのは、解釈の必要性の有無ではなく、正しく解釈しているかどうかです。間違った解釈をすれば、間違った聖書の理解が生まれてしまい、それが様々な教派を生み出す一因にもなってしまいます。パウロの手紙について、ペテロは、「その手紙には難しく理解しにくい個所があって、無学な人や心の定まらない人は、それを聖書のほかの部分と同様に曲解し、自分の滅びを招いています」（ペトロの手紙二3：16）と述べています。間違った解釈は、自らの滅びを招きかねません。わからないときは勝手に解釈したりせず、他の聖書箇所で何と言っているのかと、全体から探っていくことが大切です。それでもわからないときは、聖霊によって答えが示されるまで、いったん保留としておくのも手です。